

広がる北欧との交流

—2007年度を振り返る—
(社)北方圏センター交流部長 小松 昭彦

【はつごみ】

いま、日本中から北欧諸国に向けて熱い視線が注がれている。『北欧』を特集した有名経済週刊誌が飛ぶように売れたということからも、人気が高さが伺える。

北海道にとって北欧諸国は、北方圏交流が始まって以来30年に及ぶ広範な交流を通して、『素晴らしいパートナー』となっている。

昨年度、北方圏センターでは、その素晴らしいパートナーのスウェーデンやフィンランドから使節団や交流団を迎え、また、駐日大使も北海道に迎えるなど、様々なイベントに深く関わってきた。その幾つかをご紹介したい。

①フィンランド大学関係者

東京にあるフィンランドセンターから、日本国内の大学等との共同研

北海道の産学連携の取り組みを紹介



専門家同士、活発な意見交換が行われた

究の可能性を探るためフィンランドの大学関係者十数人が来日することとなり、本州の大学を訪問するがその際北海道にも行って北方圏センターを訪問したいとの要望が寄せられた。これは、主要メンバーの一人に、長年にわたって北方圏センターとの関わりが深い、ラップランド大学のユハニ・リルベリ氏の推奨によるものと思われるが、いずれにしてもこれを受け入れる方向で検討が進み。次のような対応となった。

2007年5月8日、タンペレ工科大学、オウル大学、ラップランド大学、ヘルシンキ経済大学などフィンランドの主な大学13校の国際交流担当者でフィンランドセンター所長など計16人が北方圏センターを訪れた。この日は、午前北大を訪問した後、北方圏センターを訪れたものである。

②スウェーデン交流展&北欧百景写真展

写真展

平成18年の「HOKKAIDO STYLE 2006」の縁を受け、当別町とレク

北方圏センターとしても、研究機関ではないが、このような機会に、専門家同士の意見交換の場の設定に向けてコーディネーターの役割を果たすことができたことは貴重な経験となった。

海道科学技術総合振興センターの船越克人部長及び北海道経済連合会の常務部長の協力をいただいた。意見交換の内容は、まず、フィンランド側のラップランド大学事務総長リルベリさんの発表のあと、北海道側の北大荒磯教授からコラボ北海道の取り組みについての発表を行った。続いて質疑応答・意見交換という順序で実施された。短時間ではあったが、産学連携のあり方などをテーマに、活発な意見交換が行われた。

平成18年の「HOKKAIDO STYLE 2006」の縁を受け、当別町とレクサンド市との姉妹提携20周年を機に来道したダーラナ地方及びレクサンド市の関係者を迎え、かである2・7を会場に、6月11日から14日まで、「スウェーデン交流展2007」を

開催した。交流展では、スウェーデンの工芸家等の工芸品の展示のほか、同地域の産業・経済についてのセミナーを開催したり、道内の工芸作家との交流会などを行い、併せて、北欧の風景をテーマに写真を撮り続ける糸数昌寧氏の作品を紹介する「北欧百景写真展」を開催し、北欧の魅力を広く道民に紹介した。

交流展のオープニングセレモニーでは、スウェーデンからのバイオリニストなどが民族音楽を演奏した後、北海道側を代表して北方圏センター・南山英雄会長が、スウェーデン側を代表してダーラナ県ミカエル・セランデル知事代理がそれぞれ挨拶した。続いて、会場に詰めかけた約100人の来場者を前に、今後とも交流の絆が永く続いていくことを願う関係者による「テープ結び」が行われた。

工芸作品の展示会場では、スウェーデンの中でも工芸が盛んなダーラナ地方の作品、手織りの織物、ハンドプリント製品、木工芸品、鉄工芸品、伝統的なデザインの燭台など、約170点ほどが紹介された。スウ



セミナーにはたくさんの市民が熱心に耳を傾けた



グルメリ盛り市民大いに共演したダンスのオーブと上がった

たことにより、一般の市民、道民にとって、スウェーデンや北欧を身近に感じてもらうきっかけになったのではないかと考えている。



会場の雰囲気の花を添えた民族音楽の演奏

デン企業の事業紹介も予定通り終了した。最後の交流パーティーは、参加者が一堂に会し、限られた時間ではあったが、スウェーデン料理やスウェーデンパンを味わったりしながら、めったにない機会を利用し、和やかな懇談が繰り広げられた。かく

エーデン特有のデザインや、鉄製品に興味を持つ来場者が少なくなかったが、中でも、有名な馬の置物「ドーラヘスト」の実演は多くの人の目を引いていた。また、開催期間中の展示会場が、一時フォークダンス会場と化してしまった。たまたま「かでの」を練習会場としているフォークダンスグループが会場を見学しているとき、民族音楽の演奏時間と重なり、スウェーデンのグループと道内のグループ合わせて数十人による「ダンス交流」となり、大いに盛り上がり、大変貴重な市民交流の場となったのである。

セミナーでは、今回来道した訪問団を代表して、行政や観光、工芸で中心的な役割を果たしている4人の方にお話し、ダーラナ地方の現状やシリアン湖周辺の観光への取り組み、レクサンド近辺の手工芸などについて、パワーポイントを織り交ぜながらのレクチャーがあり、約70人の参加者は最後まで熱心に耳を傾けていた。

北欧百景写真展は、「北欧百景・四季折々に―糸数昌寧写真展」と題して、北欧の風景をテーマに作品をとり続けている写真家糸数氏のコレクションから約50点のパネルを展示したが、北欧の清涼な空気が織りなす美しい色彩に、会場を訪れた来場者は、しばし目を奪われていた。

また、前年スウェーデンを訪れた工芸作家たちが主体となった交流会では、ビールを飲むほどに片言英語なりに話が弾み、スウェーデンの代表団からはバイオリンとベースの演奏、コーラスも飛び出し、大変な盛り上がりとなった。やはり、交流は人と人、フェイス・トゥ・フェイスですね。

スウェーデン側から、ぜひ札幌で開催してほしいという強い要望があり、スウェーデン交流センターと協力、連携して実施したイベントであったが、これを実施したことにより、一般の市民、道民にとって、スウェーデンや北欧を身近に感じてもらうきっかけになったのではないかと考えている。

③スウェーデン meets 北海道

今年の10月21日、我が国には当別町にしかない「スウェーデン交流センター」で、駐日スウェーデン大使館主催によるプロモーションイベント「スウェーデン meets 北海道」が開催された。大使館からは、ステファン・ノレン大使をはじめ約10人の方々及び在京スウェーデン企業5社の方々から来道した。これに迎え、北海道側からは、高橋北海道知事、上田札幌市長、高向道商連会頭など行政、民間などのそうそうたるメンバーが会場に詰めかけ、また、地元当別町では、町長以下多くの議員、市民、行政関係者などが参加することになり、全体で100人を超える大イベントになった。

この開催に当たっては、様々な困難があった。大使館の希望する日が行楽期の日曜日であること、招待者リストの多くはきわめて多忙な方々であること、会場のロケーションはいいが、

ある。しかし、大使の実施に対する希望が非常に強いことから、会場を提供するスウェーデン交流センター、地元当別町、そして北方圏センターが実現に向けて協議を重ね、実施する以上はぜひ成功させようということになり、働きかけに様々な工夫をしたりして、ついに実現にこぎ着けたのである。北方圏センターをはじめ、関係者それぞれが手分けして、大使館に代わって、各企業、団体等に招待状を持参し、直接参加への協力要請をしたりした。

当日は、開催時刻まで雨が断続的に降り続くあいにくの天候であったが、東京からの空の便も順調で、参加予定者のほとんどが出席してくれた。プログラムも順調に推移し、イベント開始時と1部と2部の休憩時間に演奏されたアトラクションの北欧音楽も好評だったし、第1部スウェーデン大使館のプロモーション活動のブリーフィング、第2部スウェーデン企業の事業紹介も予定通り終了した。最後の交流パーティーは、参加者が一堂に会し、限られた時間ではあったが、スウェーデン料理やスウェーデンパンを味わったりしながら、めったにない機会を利用し、和やかな懇談が繰り広げられた。かく



スウェーデン大使夫妻によるトークショー

してこの行事は見事な成功を収めたのであった。

④三越「北欧展」
昨年10月16～21日の6日間、札幌三越では、開店75周年を記念し、10階催物会場での物販をメインに、全館を通し初めて北欧をテーマにした「北欧スタイル」を展開し、北海道の市民に北欧文化を紹介する「北欧展」を実施した。

三越では、10階催物会場で、この間に、北欧に関わるさまざまな文化的なアトラクションを実施したいとの構想があったが、具体的な手だてが見つかからないままになっていたようである。その後北方圏センターからの働きかけがあったことから、事態は急速に進展し、イベント担当者との再三にわたる協議の結果、スウェーデン大使のトークショーをはじめ、スウェーデンの料理教室、フィンランドの民族楽器カンテレ演奏会、北欧語学セミナーなど多様なプログラムが組み込まれた。期間中、文化関係イベントで、延べ350人

に上る方々が足を運んでくれたそうである。北欧の物販会場の一角での催しとなったが、来場者の多くは大変興味を持った様子であった。特に、スウェーデン大使のトークショーは軽快なテンポで進められ、話題が、北欧の家庭での夫婦の役割、家庭料理、教育・子育てなど身近な問題に及んだこともあってか、フロアからの質問もたくさん飛び出し和やかな雰囲気のうちにお開きとなった。かくして、主催者側の催物会場での売上目標も無事達成されたとのこと、めでたしめでたし。

⑤スウェーデン学校交流

再三登場してくるスウェーデンで開催した「HOKKAIDO STYLE 2006」、その開会式を前日に控え、あわただしく準備に専念していたリッショープの工芸品展示会場に、一人の女性が現れ、この事業にも深く関わっている北海道東海大学教授と事業の総括をしていた当センターの専務理事に話しかけてきた。東スウェーデン地区地域連合の国際コーディネーターをしているウラ・カールンさんであった。東スウェーデン地区の職業系高等学校で、北海道の学校と交流をしたいとの希望があ

り、手がかりをつかみたいとのことであった。

両地域の今後の具体的な交流につながる話であり、専務理事も、大きなイベントの初日を翌日に控えて準備や、地元側責任者との打ち合わせなどで忙しい最中だったが、概略をお聞きするとともに、彼女とは、さらにメールでやりとりしていくことなどを約束した。

その後1カ月ほどして、北海道東海大学の教授を介して、スウェーデン側では、職業高校生の北海道の学校又は企業での国際インターンシップを希望しており、分野は、造園、花卉、ホテル、レストラン、家具などが候補に上がっていること、また、事前の打ち合わせのために北海道を訪問する用意があることなどが伝えられた。

これからがスタートである。北方圏センターとしては、交流のお世話や仲介をすることはやぶさかでないが、何しろこの程度の情報では、何も準備することができない。そこで、もう少し詳しい情報を得ようというところで、第一段階の照会を行っ



今後の交流に向けて具体的な協議が行われた

た。

プログラムに参加しようとする学生は、どのような学校に属し、年齢はどのくらいか、インターンシップの内容は、どのような内容を考えているのか(授業の見学、学生同士の交流、花卉栽培農家の見学・実習、造園技術の実習など)、来道予定の人員は何人か、来道する時期、期間はどのぐらいを考えているのか、等々である。

昨今、通信手段の発達、とりわけ、Eメールの普及で外国との連絡も非常に便利になってきているので、われわれ日本人の感覚からすれば、向こうからのリクエストでもあり、すぐにも返事が来るものと思ってしまうが、そう簡単ではなかった。そうはいいいながらも、道内の職業高校で、希望するような課程はあるのか、外国人を受け入れる可能性はあるのか、もしくは、専門学校でそのような課程を持っている学校が



調理製菓専門学校を見学

あるのか、など情報収集を進めていった。

こうした過程の中で、前述のウラ・カーリンさんから、予算措置もされたので、2007年11月に北海道を訪れ、学校交流、インターシッ プ受け入れの可能性について学校関係者と相談したいとの要望が寄せられた。未確定な部分はあるものの、これまで行ってきた情報収集などをともに、道教委をはじめ、料理・製菓系と造園系の専門学校、更には、道新文化センターにも協力を依頼し、6日間にわたるスケジュールの調整を行った。

いよいよ当日、11月7日に、ウラカーリンさん、ローランド・ナチュールブルークス高校理事長など4人



スウェーデン&北海道・地域政策セミナーに出席したスウェーデンの国会議員ら
=京王プラザホテル

の面々が新千歳空港に降り立った。

それから12日までの滞在で、北方圏センター、道教育長への表敬訪問を初め、前記の専門学校2校を訪問しての見学・協議、道教委でのレクチャー、北方圏センターでの「北方圏講座」の講師としての対応、道新文化センターでの日本文化の体験、旭山動物園へ日帰りツアーなど、ハードなスケジュールをこなし、最終訪問地は、G8サミット開催地の洞爺湖を訪ね、あいにくの天候ではあったが、洞爺湖とその周辺の雰囲気は垣間見ることができたことと思う。

最後に、今回コンタクトが取れた各学校とは、直接メールで情報交換などを行い、交流の可能性を探っていくこと、当センターも、必要に応じて交流推進の協力をする、などが確認され、北海道を離れた。その後の便りでは、いよいよ本格的な学校交流に向けて動き出しているとのことであり、相互交流の発展を願わずにいられない。

⑥スウェーデン&北海道・地域政策セミナー

スウェーデンの国会に、超党派の「スウェーデン日本国会議員団」がある。彼らは4年に一度日本各地を

訪れ、地域の実情を視察したり、各地で意見交換をしたりして、日本とスウェーデンの相互理解と友好促進に努めているという。この度、この議員団の日本訪問をコーディネートをしているスサンネさんから、個人的に親しい大学院生の渡辺まどかさんに、2008年3月日本訪問の際、東京のあと北海道を訪問したいとの希望が寄せられ、北海道でのいくつかのメニューが依頼された。関係者で相談の結果、そのうちの一つ「地域開発に関するセミナー」を北方圏センターが担当することになった。

予定されている日程を見ると、極めてタイトなスケジュールである。このセミナーの時間は全部で2時間しかない。北海道の地域開発の政策を曲がりなりに理解してもらうような内容や、スウェーデン側の発表時間などを考えると、逐次通訳で実施すると単純に2倍の時間がかかるので適当でない。また、このような行事の性格上、多数の聴衆を集めて同時通訳で実施するまでもない。というわけで、この2時間をフルに活用するため、全部を英語オンリーで通すことにした。言葉の問題もあり、北海道側発表者に苦慮したが、

本道の地域開発の状況について、深

野弘行北海道経済産業局長に、北海道の観光振興政策について、北海道経済部の加藤浩主査に、それぞれお願いすることができた。しかし、それぞれ国家公務員、地方公務員幹部として、議会への対応などがいつあるとも限らず、不確定要素を抱えながらも準備を進めていただいた。いよいよ当日となり、このセミナーは予定通り実施されたが、案ずるより生むが易しとでもいうか、無事終わることができた。内容は、予定していたとおりであり、北海道側、スウェーデン側いずれもパワーポイントやビデオを駆使しながらのわかりやすいレクチャーとなった。英語堪能な約20人の傍聴者も最後まで熱心に聞き入り、まずは日本とスウェーデンとの交流、相互理解促進に有意義なひとときとなった。

おわりに

以上、北欧との交流事業の主なものを振り返ってみたが、この1年、両地域の双方方向の交流がますます促進されたことはうれしき限りである。2008年度は、NRC設立30周年の節目の年でもある。これを契機に、北欧との交流が一層進展することを願ってやまない。